

史 談

2018 (H30) 8・10

■ 平成30年度の総会、開かれる

さる5月26日、鮎貝地区コミュニティセンターで史談会の総会が開かれました。当日は田宮教育次長からごあいさつをいただいたほか、議事として29年度の事業報告と決算の承認、30年度の事業計画と予算の承認、更に役員の改選がありました。

総会後は、渋谷敏己氏より「伊達氏と能〜『草木供養塔』の系譜をたどる〜」についての発表を、また、この度、博士号を取得された守谷英一氏より「手仕事の生活誌〜白鷹紬と深山和紙を中心に〜」についての特別講演をいただきました。

なお、今年度の研修旅行は10月に湯殿山方面を予定しています。詳細についてはまもなくご案内させていただきますので、多数ご参加ください。



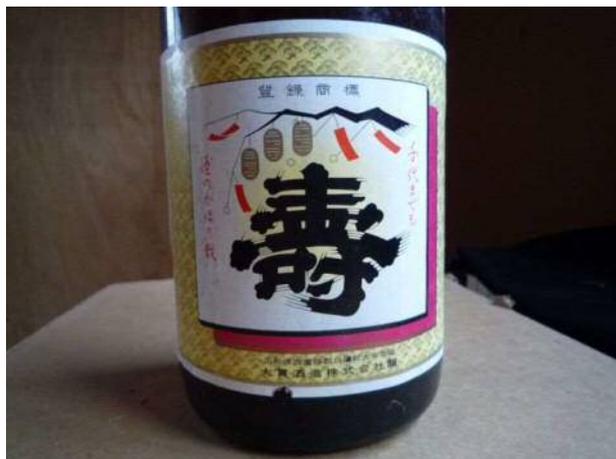
■ 役員 (平成30～32年度)

会長 丸川二男
 副会長 平吹利數 渋谷敏己
 事務局長 守谷英一
 幹事 佐藤京一 加藤晃一 高橋克範
 石井紀子
 幹事・会計 竹田伊智子
 監事 長澤千恵子 嶋林淳子

■ 「壽」の思い出

伊藤 隆

物置の奥から一升瓶が1本出てきた。大一・(だいいちぼし) 大貫酒造の2級酒「壽」未開封である。私がおいておいたものだ。濁りはない。荒砥上町、八幡様門前にあった老舗の酒造店で造られていたもの。他に1級酒の「金舞鷹」があったと思う。「壽」の商品名は大貫酒造だけで、他は寿に千代とか、霞城とかが付いている。



清酒 壽 千代までも酒のかほり哉 と見える

壽2級酒未開封 昭和50年頃製造か

江戸時代以前から続いていたその酒造店は貝生の若布沢の水源に松尾神社を建てている。その店も昭和50年代半ば頃に店主が土蔵で自死し、店も潰れた。その後、私が酒を買った由勝見酒店も閉店してしまった。

大貫酒造店の息子さんと白鷹山頂で一緒になったことがある。年末に登り元旦を迎える「越年登山」の時である。彼は一人で登ってきた。まだ学生だという。古い小屋で焚き火をし、一緒に一晩酒を飲みながらいろいろ話をした。「そのうち山岳会に入らんか」と言ったような気もする。好青年だった。彼は一足先に下り、また来年も来るのかなと思ったが、その後家勢は急変し、会うことはなかった。彼も生きていればもう還暦の頃、その後も山に登っているだろうか、今頃は一体どうしているのだろうかと思う。

店と巨大な酒蔵は解体され、我が家からは今まで見えなかった愛宕山が見えるようになった。店前の国道で路盤入れ替え工事の時、道路内から大きな木桶が現れたことがあった。水道管が通らず、迂回して配管した。おそらく今でも埋まっているだろう。跡地には縦の大木だけが残った。知人の話によると、大貫酒造が所蔵していた

古文書等が、現在も全国の収集家の間で流通しているという。破産の時、管財人が古物商に処分したのもあろう。

その後、岡崎商店改フレッシュプラザオカザキが建ち、私や子どもたちが利用する場所になった。岡崎商店も規模拡大してきたのだが、そこも十数年前潰れ、樫の木も枯れ今は住宅地になっている。



現存する「壽」はおそらくこの1本だけだろう。「千代までも酒のかほり哉」の文字が見える。千代萬世まで栄えるのは理想ではあるが、いつかこの酒を開封して、誰かと飲む時が来るのだろうか。

■ 大石沢隧道探索 1

丸川 二男

この7月26日、以前から行ってみたいと思っていた中の沢の上流にある「隧道」に有志で出かけた。山岳会、役場の林務、土地改良区など、それぞれに関心のある人の集まりだが、地元の小林さん以外は現地に行ったことがないだけでなく、当の小林さんも時がたっていて道が定かでないという。

葉山の登山道に沿って水路があり、一部には下から山道を担ぎ上げたというU字溝もそのまま残っている。その先は少人数に分かれて沢を登り始めるが、すぐにくつもの小さな沢にぶつかる。周りには立ち木が生い茂り、どこが昔の道だったかなど見当もつかない。大きな声をかけ合っ木の間をあちこち騒いでいると、枯れ葉の中からピンクのリボンのついた木の枝が見つかった。さらにあっちこちと分かれて登っていくと、「堀だ」と声がある。近くに行くと巾50センチを超える立派な水路である。

木の枝をくぐりながら水路を登っていくと、突然、少し広い場所に出たと思ったら土が盛り上がった先に丸

い穴が見えた。そこが隧道の出口だった。なにやら獣が出入りしているような気配もある。入り口は半分ぐらいふさがっていた。やっとたどり着いた、とそれぞれに写真を撮って一息つく。

さらに隧道の上の部分のやぶを掻き分けて入り口を探して中をのぞく。やはり半分ほどふさがっていたが、中がつぶれているようには見えなかった。



その先は山の斜面に沿ってほぼ平坦な水路の部分歩き、取水していた川のふちまで行った。途中の急な斜面にはコルゲート管を埋設したり、崩れたところにシートで手当てしていた箇所もあった。小林さんは「これを背負ってここまで来たんだ」と教えてくれた。下からここまで持ってきたと聞き、ただ驚くしかない。ここから取水したという場所に、は大きな岩とブナの大木があった。GPSによる高さは1050だという。帰りには今度くる時のために、目印のテープを入念に下げてきた。

この隧道の話を知ってから、いったい何年になるだろうか。当時話を聞いた人も、隧道を掘ったという人も亡くなり、少しばかりのメモも書きかけたが、今となるとそれもさがせない。近くの人と沢を登ったりもしたが、途中でわからなくなって帰ってきたこともあった。しかし、今回は新たに地元の人から話を聞いただけでなく、高野の山道の脇にあった「大石線水路開鑿記念碑」という石碑も確かめ、情報のあらかたは手にしたうえでの現地踏査である。現場に足を運ばなくてはわからないことばかりである。今回はその経過をつづってみたい。

■ 白鷹山岳会事務局長の伊藤隆さんから原稿をいただきました。ありがとうございました。